災害時医療の一回想

札幌市医師会
クリニック・イン・ザ・モーニング
岡田（おかだ）　純一（じゅんいち）

北海道医師会会員の皆様、2025年もお疲れ様でした。十年ぶりに寄稿依頼をいただき、題材を心に探しながら眠りについた2025年12月８日の夜、不気味な携帯アラームの後に強い揺れがありました（北海道・三陸沖地震：マグニチュード7.4）。横揺れする食器棚を押さえながら昔の体験を思い出したので、やや古い話ですが筆を進めてみます。

・北海道南西沖地震（1993年７月12日：マグニチュード7.8）

防衛医科大学校病院（埼玉県所沢市）の後に自衛隊中央病院（東京都世田谷区）で初任実務研修を終え、自衛隊札幌病院（当時は札幌市豊平区）内科医官として着任した私にとって、初めての病院当直の夜でした。当直に入って来院患者が落ち着き、遅めの夕食を終えた22時過ぎに大きな揺れが生じました。病院内で被害がなかったのは幸いでしたが、当直室に戻ってTVをしばらく観ていると、どうやら奥尻島で大被害が発生していることが伝わってきました。しかし離島であり通信技術の限界があったのか、映像配信が全く入らない状況でした。各町村から緊急発信される生の電話音声中継のみが黒い画面でTV放送され、被害状況は推測するしかありませんでした。

奥尻島には航空自衛隊レーダサイト基地があります。「患者の航空搬送があり得るから、今夜は眠れないな」と緊張感を高めていたところ、まもなく病院職員がやってきて私に告げました。「あっ、先生、もう当直いいから行ってください、30分後に病院出発です」半分気が動転しそうになりながら大急ぎで準備を整え、真駒内駐屯地に待機していた丘珠航空部隊のヘリに大量の医療資材と共に押し込まれ、まもなく私は朝陽が降り注ぐ奥尻空港へ降り立っていました。日赤医療チームがいち早く震災現場入りする実績は有名ですが、この震災は離島という状況もあり、私を含めた自衛隊医療部隊が救援の先陣でした。

高台に位置する空港で直ちに医療チームの班編成を行い、付近の民家各所に被災患者が救助収容されていることを知らされました。海岸部の青苗地区は地震そして津波、さらに大規模火災が起こって壊滅状態にあり、我々はもうもうと立ち昇ってくる煙に目を抑えつつ、町民の誘導のまま各所へ救助に向かいました。私が初動で救助した被災患者の多くは鈍的外傷でした。津波は溺死もあるが瓦礫による強力な打撲傷（交通外傷に近い）が多いことを学びました。また津波災害は被災直後に生死が分かれてしまう一面を感じました。幸運にも救助された方々はいずれも意識清明、でも動けない、身体は砂だらけという状態でした。島外へ後送すべき被災者のトリアージを先ず行ったのですが、搬送を隊員に任せるにあたって困ったことがありました。紹介状書式の準備がなかったのです。急を要する現場で「○○先生　御机下」などと認めている場合でもなく、やむを得ず民家玄関先に置いてあった段ボール箱を拝借して面を破り、賞状のような大面に黒マジックで状況を記して渡し、その後ヘリで札幌や函館に搬送されました。

救援部隊の一番下の医官であった私はその後、余震が続く青苗地区の端の患者救助、地元消防団との遺体捜索と収容も手伝いました。同乗させていただいた消防団のトラック荷台は帰路の途中で遺体でいっぱいとなり、消防団の運転手と私以外は車を降りて徒歩で遠路を戻りました。自衛隊の拠点として提供された町民会館も二日目には遺体収容で満杯となり、我々は屋外に新たな天幕を設営せざるを得ませんでした。夜半になっても、背中直下を突然突き上げる余震に驚きつつ、眠りの浅い夜を重ねました。

この地震津波は日本海側で生じた過去最大級の災害であったため、救助物資の事前準備も想定外でした。とりあえず使えそうなものと、病院倉庫から大量の点滴や創傷処置資材などをヘリに積み込み、私はシートベルトはおろか立ったまま資材にヘリの窓へ押し潰されつつ移動しました。結果として、このような医療資材を緊急現場であまり使うことはなく、時が経過すると意外な需要に気付かされました。「血圧とか、いっぱい薬を、でも全部家において逃げてきた」「インスリンを使っていたんだけど、どうしたらいいの」「家族が見つからなくて不安で、なにか眠れるような薬とかはないの」「ここに水をもらえませんか（入れ歯の入ったコップを差し出して）」など、慢性疾患への継続対処や被災後の精神面を含めたフォローが震災における大切な救援課題であることも学びました。

日本ではその後、大震災が重なりましたので本震災の被災規模は比較して小さく感じるかも知れません。しかし、離島という特殊環境で発生した事例として一つの教訓と思います。結びで話題を変えて恐縮ですが、もう少しお読みください。震災と通信技術について思うところがあります。

・災害時の通信について

奥尻島震災派遣当時（1993年）の主たる通信手段は固定電話でした。病院からの医師の呼び出しもポケベルのみ、ガラケーはおろかPHSすらない時代でした。地図も持たされないまま突然見知らぬ島へ降り立った私は、本当に原始的ですが、地形と太陽の方角を確認しながら移動していました。

現在、携帯端末の充電があってキャリア中継基地局も無事ならば震災時も情報（位置・安否・状況）を集めることが可能です。実際、12月８日の北海道・三陸沖地震の夜は、TVよりもXで個人が配信する現地動画が情報量と質で優っていました。携帯端末を含めた電源確保がいかに重要かは「北海道胆振東部地震（2018年）」のブラックアウトでご存じと思います。しかし、基地局が機能不全に陥ってしまった場合を皆様は想定したことがありますか？

解決方法は衛星通信です。現在の携帯端末でもSOS衛星通信発信は可能ですが、インターネットにつなぐためには地球上空の人工衛星にアンテナを向けるしかありません。すでにご存じの方もいらっしゃると思いますが『Starlink』という商用サービスがすでに稼働しています。奥地の山小屋などで活用されて好評のようです。それほど高くはない初期設備費用と定時使用料がかかり、アンテナへの電源供給も必要ですが、病院など中規模以上の拠点施設であれば配備しておくと震災対策としてかなり有効と思います。個人使用向けパッケージもあります。私はポータブル電源と小さなソーラーパネルを所持していますが、将来的な導入を検討し始めています。

最後に、本文書の最初の方をご覧ください。2025年12月８日に起こった北海道・三陸沖地震と1993年の北海道南西沖地震の規模はほぼ同一です。奥尻島は震源直上ゆえに大きな被害が生じましたが、怖さのレベルは一緒なのです。「北海道・三陸沖地震後発地震注意情報」は解除されたようですが、日本海溝沖はエネルギーが蓄積されているように私個人は感じます。余談なく、平時であればこそできる「備え」を皆様個人でできる範囲で整えてください。